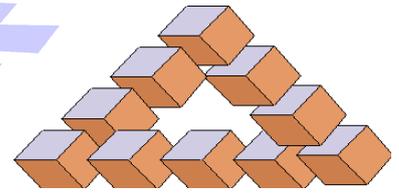


# 会長の御信



No. 11 H31.1.9

横浜市小学校算数教育研究会長 小林 広昭

**研究主題 「数学的に考える資質・能力を育成する算数科学習」  
～数学的な見方・考え方が成長する学び～**

## **参会者の「問い」を生みだし、変容させ、深い学びの研究会に！**

本研究会は、今回の学習指導要領の目指す授業の実現に向けた研究を平成28年度より進めてきました。当初は、目指す方向もままならない面がありましたが、今回の学習指導要領作成の中心的な役割をされた先生方の指導を受けるとともに、多くの会員の先生方の主体的な研究活動への取り組みにより、少しずつ課題を解決しつつ、進むべき方向が見えてきていると考えています。

算数科における「子どもの問い」とは、「子どもの思いや願いから生じる数学的に価値のあるもの」と夏季セミナーで定義しました。そして、研究主題の目指す授業を子どもの問いを引き出すことで、実現しようと研究を続けてきました。これまでの研究会での論点として、「本單元における資質・能力とは？」「本時の数学的な見方・考え方は？」「本單元における数学的な見方・考え方の成長とは？」「本時における数学的な活動は、子どものものになっているのか？」「学びが子どもの文脈に沿っているのか？」「問うべき問いは、子どもから引き出すことができたのか？」などが上がってきました。さらに、研究会で出てくるキーワードとして、「筋道立てて」「統合・発展」「簡潔・明瞭・的確」「目的に応じた」「よさ」「活用」なども話題になりました。

これは、役員始め、各学年部会長副部会長が、毎月、役員会で話題にするとともに、提案してくださる先生方とも事前に論議を重ねてきたためと考えます。さらに、毎月各部会のファシリテーターを務める部会長副部会長は、その都度、研究会の運営計画（まるで、研究討議の指導案のように板書写真もあります。）を作成して、研究会に進めてきました。その成果が、研究の深化につながっていると考えます。

ただ、今までの論点は、この提案における資質・能力は？数学的な見方・考え方は？数学的活動は？・・・といった教材研究の内容や知識にかかわる部分が多かった気もします。「問い」の形にすると、「○○は、何だったのか？」「○○はどうだったのか？」結果としての実践の可否を話し合っていた部分も多かったのではないのでしょうか。

そもそも子どもの「問い」について話題にしてきましたが、参会者の教師の「問い」とは、どのようなものだったのでしょうか。おそらく、参会者のみなさんの

思いや願いは、「よい教師になりたい。」「よい授業がしたい。」から「新しい学習指導要領を実現する授業について知りたい。」「子どもたちが将来困らない資質・能力を育成する授業ができるようになりたい。」と変容していると思います。でも、どの方も「子どものために」という思いは変わらないと思います。

そして、「資質・能力を育成する授業とは？」「どうしたら資質・能力を育成する授業ができるのか？」「数学的な見方・考え方を成長させる授業とは？」というように問いが生まれ、変容してきているのではないのでしょうか。そんなに簡単ではなく、もっと具体的な「問い」をたくさん生みだしてきたとも考えます。

研究会は、様々な経験や考えの違いをもった方たちの集まりで、なかなか一つの「問い」にまとまっていくことは難しいと考えます。論点を絞れば絞るほど、自分の思いとズレが生じ、話しにくくなっていく面もあると思います。でも、さらに研究を進めるためには、「〇〇は、何だったのか？」というような答えを求める「問い」ではなく、「問いが生まれたのは、〇〇がよかったからだ。」「〇〇の展開に原因があるのではないか。」「教材の提示の仕方に要因があるのではないか。」「教師と子どもの対話に、秘密があるのではないか。」など、一応には、答えの出ない「問い」と私たち自身の主体的な対話が必要なのではないかと考えます。実践をしないものが、評論家的に意見を発するのではなく、この部分が素晴らしいと思うので、私も実践してみたい。できれば、それを次回の研究会につなげて、「先月は、ここが鍵だと思ったが、うまくいかなかった。だから、今度は、こう変えてみようと思う。」つまり、参会者のみなさんが互いに、刺激し合い、互いの変容を生み出す、そして、実践を通して、さらに変容していく。そんな研究会にしていだきたいと考えます。難しい話になりましたが、ご一考ください。

最後に「対話型授業の理論と実践」（多田孝志著 教育出版 2018.10）から引用します。

「多様な文化や価値観を持つ人々と共生する社会では、知識の受容者・消費者としてではなく、知識や体験を活用し、様々な人々と共同し、新たな知や解決策を共創できる人間を育成しなければなりません。このためには、学習の場において、学習目的を明確に持ちつつ、学習環境、対象、方法などを柔軟な発想で構想し、学びへの意欲を生起させ、深く思考していくことの愉悦を学習者に感得させる学びを創り出すことが必須です。

教師には、形骸化・形式的・前例踏襲、マニュアル化した学習方法を打破する冒険心・勇気が求められます。殻を破ることが、未来を創る力を高めるのです。」

今こそ、教師自身が「問い」を生みだし、「問い」を変容させ、自らの学びを深化させていくことが求められていると考えます。 よろしく願いいたします。

<この「会長の独り言」は、印刷して配付していただいてもかまいません。>